

## 大岡忠相



おおくは食わねえ たったえちぜん

作家

童門冬二

## 水野老中、突然罷免される

江戸市内にある氷川神社の諸経費を、幕府の財政で面倒をみたいという將軍吉宗の要求を、水野忠之はビシッと断わった。反対した。

現在でいえば、これは当たり前前の話で、特定の宗教に税金をまわすということは、憲法違反になるから常識としてできない。しかし、吉宗の時代に憲法はない。まして、宗教というのは国民の精神を安定させるための装置にもなっている。

このころの現在でいう住民登録は、すべて寺が引き受けていた。したがって地域の寺が、そのまま現在の地方自治体の役所になる。それだけの力を持っていた。

したがって場合によっては吉宗が、「氷川神社の面倒を国家でみたい」という説も、承認する層がないとは限らなかった。

しかし水野にすれば、「それは、税金の使い方としては公平を欠く。一定の宗教に年貢を注ぐことはできない」

という筋の通った理論なのである。またもや真っ向から否定されて吉宗は実に嫌な顔をした。

その表情をみて水野は、  
(この後になにかくる)

と予感した。嵐の前の静けさといった気分になった。

しかしこの水野忠之の反対の言葉をきいて、いちばん胸をなでおろしたのは実をいえば松平乗邑だった。かれも反対だった。

しかし自分の口からいま反対の言葉を出すことは、せっかく築き上げてきた吉宗との良好な人間関係を壊すことになる。信頼も失う。おそろく吉宗の心づもりでは、

(たとえ水野が反対しても、松平ならきつと承知してくれるだろう) と思っっているにちがいない。松平もそのことはよく知っている。

しかし水野のいうことは正論だ。幕府の財政から特定の神社の経費を丸ごと補助するというのは、やはりほかの神社への公平さを欠く。そう



なると、神社だけではなく寺の問題も出てくる。財政通の松平にすれば、やはりこれは吉宗らしくない不公正な扱いだと思っていた。とくに吉宗がいますすめている、

「享保の改革」

の趣旨にも反すると思っていた。そのへんは松平乗邑もやはり優秀な高級官僚だった。しかし吉宗からたずねられれば、松平の返事もおそらく曖昧なものになり、それはかなり反対の色を濃くしたものになっただ

ろう。それを水野が先に手をあげて救ってくれた。

こうして松平乗邑は水野忠之によって、二度助け船を出されたことになる。結果として水野は吉宗の憎しみと恨みを一身に負うことになった。

しかし水野自身も將軍吉宗に絶望していた。この回答をすることによって水野も、

（これで上様ともお別れだ）と腹をくくっていた。

「うーむ」

突然、吉宗が訳のわからないうめき声を出した。そして、しばらく天井をみあげていたが、やがてパッと視線をまっすぐ水野に向けた。笑っている。しかし薄気味の悪い笑顔だ。能面のような表情になった吉宗がこういった。

「水野、長年ご苦労だったな」

「は？」

「年も取ってやはり疲れが身に沁みるだろう。これからは、健康状態のよい日だけ城に上がるようにせよ」

「は」

唐突のことなので水野はおどろきの眼で吉宗をみかえした。嵐がこんなに早くやってくるとは思わなかったからである。吉宗が、

「身体の具合のいい日だけ城に出てこい」

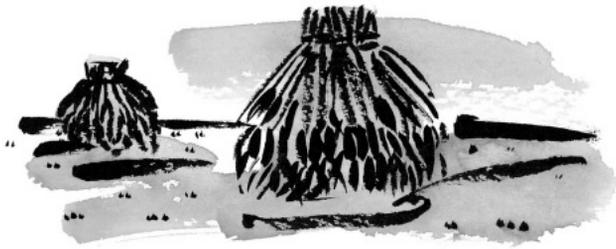
というのには、あきらかに、

「ルーティンワークから解放する」

ということである。つまり、

「勝手掛老中（総理大臣兼財務大臣）の職を免ずる」

ということである。座にいた連中もさすがにびっくりして顔を見あわせた。まさか満座の中で吉宗がいきなり水野にクビを申し渡すとは思わなかったからだ。しかし水野は微笑



んだ。狼狽する心を抑えて静かに頭を下げた。そして、

「上様の温かい思召し、この水野、感謝してお受けいたします」

そういった。吉宗はちよつと意外そうな顔をした。かれにすれば意地悪でそういうことをいったのだから、水野はさぞかしおどろいて場合によつては、自分の考えを改め、

「氷川神社の件、承知いたしました」というかと思っていた。が、それはなかった。水野はあくまでも自分の意志を通した。吉宗は渋い顔になつてうなずいた。

「わかつたなら、あしたからそうし

ろ」

あしたからそうしろというのは、あしたから江戸城へ出てこなくてもよい、ということだ。座の中で江戸町奉行の大岡忠相だけが痛ましい表情で水野をじつとみつめていた。こうして、吉宗の改革の太い補助柱であった水野忠之は罷免された。しかし、水野だけではなかった。江戸町奉行大岡忠相の身にも、ヒシヒシというよりもむしろドカドカと大きな危機が迫っていたのである。それは、「米価安の物価高」という現象であった。

## 米の増産が逆に生活を苦しめる



「不安定な要素」

を持つている。これが、「米を主税にしている」と、国家財政の基礎が固まらない」

と指摘して、思いきつた税制改正をおこなったのは、明治になってからの大蔵省主税頭（しゅぜいのかみ）だった渋沢栄一である。渋沢は安定税源を求め土地に目をつけた。そこ

で年貢である米に変えて地租を新しく設け、しかも年貢は米の現物納付が建て前だったものを、貨幣による納税に切り替えた。

江戸時代は、この不安定財源が主たる収入であるとともに、

「その年の米価によってほかの物価を定める」

という妙な経済原則を持っていた。

しかし、吉宗は「米將軍」といわれるように、大規模な「米の増反」を命じた。とくに関東地方の増反については、江戸町奉行である大岡忠相に命じた。これは本来勘定奉行の所管であつて、町奉行のやるべき仕事ではない。そのため大岡は勘定奉行所の役人たちからは睨まれた。しかし勘定奉行所を統轄するのは勝手掛老中の水野忠之だ。水野は大岡を敬愛していたから、勘定奉行所の不満を抑えてくれた。大岡はそれなりに関東地方の篤農家の協力を得て、増反政策をスムーズにすすめていった。これが模範となつて、全国の天領（幕府直轄領）でも米の増反に励み、米の収穫量は年々増えていった。しかし、よろこんでばかりはいられなかった。マイナスの現象も起こっていた。

江戸時代の国家（幕府）財政や、地方自治体（藩・大名家）の財政が、年貢によって支えられていたことはよく知られている。年貢というのはそのままのことである。しかし米はその年の状況によって、収穫量が違う。天候の具合もあれば、自然災害が起こる場合もある。つまり財源としては非常に、



もともと吉宗が米の増反を命じたのは、そのころの少子化対策であった。つまり吉宗にすれば、

「農村人口をもっと増そう。それには、食糧である米の増反が必要だ」

という動機からこれを政策化した。農村では当時、間引きがおこなわれ、生まれたばかりの生命が将来労働力にならなければ次々とあの世へ送り返された。吉宗は、

「こんな行為は非人道的であって、

絶対ゆるせない」

と考へ、その禁止を命ずると同時に、

「間引きが根絶できるように食糧の増産をはかれ」

と命じたのである。そして、

「大岡なら、町奉行の仕事のほかに米の増反も成功するだろう」

とみこんで大岡にその仕事を命じたのである。ヒューマンな立場に立つての仕事だから、その限りにおいて

では大岡も異論はない。

しかし、日本の総人口が急激に増えたわけではない。おそらく当時のこの国の総人口は二千五、六百万人ではなかっただろうか。徳川家康が幕府を開いたときの日本の総人口は約千三百万人だ。そして、明治維新時の人口は三千三百万人だといわれる。二百六十年におよぶ徳川幕府の政治下で、人口増は約二千万人であった。千三百万人といえば、現在の東京都の人口だ。そして現在の日本の総人口は一億二千万人ということだ。明治維新後の人口増は約一億に達する。

しかし、急激な米の増産は、総人口の食糧を賄うのに十分だった。やがて米が余りはじめた。いきおい米価はどんどん低落する。困ったのは幕府財政担当者だ。米の値段が安くなれば、それだけ税収が減るということになる。

そもそも厄介なことは、幕府役人の給与は米の現物支給なので、これは実質的に、

「ベースダウン（賃金の引き下げ）」  
ということになる。そしてもっと厄介なことには、米の値段が下がったからといってほかの物価が下がる



わけではない。一定の価格を維持しているし、場合によっては高くなる場合もある。そうなる」と

「米価安の物価高」

ということになり、米価によって諸物価を統制するという原則が大いに乱れてしまう。結果的には、武士だけでなく国民も生活が苦しくなってきた。

こういう状況を幕府首脳部が黙視していたわけではない。大岡だけではどうにもならないので、水野忠之が中心になって「米価調整策」を展開した。いちばん手っ取り早いのは、米のダブついた流通を止めることで

## イナゴが経済を乱す

ところがそんなときに皮肉な現象が起こった。享保十七（一七三二）年に、突然瀬戸内海沿岸でイナゴの大群が襲来した。近畿地方から西の地方にかけて、稲が全部食い尽くされてしまった。いわゆる、蝗害（こうがい）である。西国は九州を含み、二百数十万人がたちまち飢えに苦しみ、その中で一万数千人が餓死して

ある。そこで、各天領に対し、「米のダブつきを食い止めるため、出荷を規制せよ」

と告げて、大坂や江戸の米市場に大量の米が流れこむのを防いだ。つまり、

「生産地にしばらく留め置き。あるいは各代官所に貯蔵せよ」

ということである。姑息な手段だったが、多少なりの効果はあった。

また米商人に対しても、

「米の貯蔵に努力せよ」

とあって、やたらに米を売り出さないように規制した。

しまった。これが江戸にも影響を及ぼした。水野や大岡は躍起になって、米商人たちに備蓄していた米の放出を命じた。が、米商人たちはなかなか素直にはいうことをきかない。つまり、

「放出量の私意による調整」

をやりはじめた。つまり自分の儲けになるように、米の放出を調整

したのである。かれらのはかれらなりに理屈を立てていた。それは大岡がいままで、

「米はあまり売らな。倉庫に貯めておけ」

といておきながら、今度イナゴの害が起こると手のひらを返して、「貯めてあった米をどんどん売り出せ」

などというのは、お上の勝手な論理であって、そうそういうことをきいていられるか、という抵抗心も湧いていたのだ。

町奉行としての大岡が経験しない現象が江戸市中に起こった。それは、「米屋に対する打ち壊し」

であった。部下から報告をきいた大岡は仰天した。大岡は潔癖な人格者だ。したがって、

「自分のやる仕事については、あくまでも公明正大であって一滴の汚点もつけない」

といういわば「きれいな行政」をめざしていた。その中には、

「打ち壊しなど起こるようであれば、自分は失格者だ」

という考えもある。ところが、それが現実に起こった。大岡は狼狽した。



日本橋に高間伝兵衛（たかま・でんべえ）という幕府出入りの米商人がいた。比較的大岡の命令に従って米の放出に協力していたが、世間はそうはとらない。高間伝兵衛が幕府の御用商人だということだけでいつの間にか、

「高間は米をたくさん持っているが、米価を吊り上げている。いちば

ん高くなつたときに売り出す気だ」という噂が流れた。そのため享保十八（一七三三）年と年が変わると、多くの市民が押し寄せて打ち壊しをはじめた。慌てた高間は自分の家の蔵に貯蔵してあった二万石の米を放出し、

「いままでの値で売るから、どうか鎮まってください」

と頼んだが、約千七百人といわれる暴徒たちはいうことをきかなかつた。かれらは口々に叫んだ。

米高間（高値）一升二合をカユに炊き

大岡（おおくは）食わねえ たつたえちぜん（一膳）

完全に町奉行である大岡忠相を皮肉る落首だ。市民民衆は敏感だ。現在の米高値の現象が、どういう政策によって生じたかをはっきり知っていたのである。大岡は傷ついた。高間伝兵衛の店は、家屋や家財が徹底的に壊された。帳簿も破り捨てられた。大岡の町奉行の職責は、現在の東京都知事・警視総監・消防総監・東京地方裁判所の裁判長などを兼ねている。とくに町奉行の職責のうちで大事なものは、

「將軍のお膝元である首都江戸の治安を守る」

ということである。それが破られた。天下の將軍のお膝元である江戸で打ち壊しという忌まわしいできごとが起こった。当然、

「治安の任に当たっているのはだれか？ 責任を問う」

という声が江戸城内に起こるのは避けようがない。

（続）